

目次

1 年生 人々の平和への思い 1

学習 1 路面電車を走らせた人々の思い 2

参考資料 市民生活の再建に向けて 5

学習 2 平和記念都市建設に向けて 6

学習 3 広島に住む私たちの平和への思い 9

参考資料 原爆の惨状を世界に伝えた海外の記者たち 12

2 年生 広島と世界とのつながり 13

学習 1 次世代へのメッセージ 14

参考資料 語り継がれる平和へのメッセージ 17

参考資料 日本のために尽力した海外の人 18

学習 2 国境を越える平和へのメッセージ 19

学習 3 私からの世界の人々への平和メッセージ 21

3 年生 持続可能な社会の実現 23

学習 1 核兵器をめぐる世界の現状 24

学習 2 国際平和に向けての取組 26

学習 3 私の考える「平和」を伝えよう 28

巻末資料 小学校で学習したことを振り返ろう 32

1 年生 人々の平和への思い



(提供：広島電鉄株式会社)



(写真：ピクスタ)



(提供：ひろしまフラワーフェスティバル実行委員会)

戦後の広島の人々の平和への思いにふれ、広島に住む私たちの平和への思いについて考えよう。

●学習の流れ



学習 1

路面電車を走らせた人々の思い

路面電車を走らせた人々の願いや思いについて考えよう。

市民の足としての路面電車

路面電車（市内線電車）は、通勤通学の人達だけでなく、県外からの修学旅行生や海外からの旅行者も乗せて広島の街を走っています。



(提供/広島電鉄株式会社)



(提供/広島電鉄株式会社)

被爆前の路面電車

広島は太田川の下流にある三角州という地形の上でできた街であり、江戸時代には、その三角州の中に城が建てられ、濠が掘られました。また、当時は7本の川が流れていたため、主な交通手段は舟でした。



▲宇宙からとらえた広島市

(提供/国土院)



▲相生橋

(撮影/米田敬昭 所蔵/米国立公文書館 提供/広島平和記念資料館)

広島の街に路面電車が走り始めたのは、1912（大正元）年11月23日。自動車が普及していないこの時代の移動方法は、徒歩、人力車、乗合馬車、舟でした。路面電車を走らせるために、水路や濠を埋めて路線を作り、電車のための橋が架けられました。明治の終わりから大正にかけて、各家庭に電気は通っておらず、家の照明はろうそくかランプだった時代に電気で走る電車が登場したのです。

当時の広島市民にとって「路面電車」とはどのような存在だったと思いますか。

.....

路面電車を初めて見た時はどのような気持ちだったのでしょうか？



被爆直後の路面電車

インターネットでは公開できません

爆心地から300m。
紙屋町交差点南東角の電車の残骸。
手前は100形電車で全壊。
奥は200形の205号。
窓や天井は吹き飛び車内は全焼。
1945（昭和20）年8月

原爆の投下時刻は、朝の人が最も多い時間でもあり、路面電車63両が運行していました。多くの車両が軌道上で被爆したのです。爆心地に近い場所で被災した車両は、全壊・全焼、大破・中破となり、営業運行中の全車両が大きな被害を受けました。

(出典「広島電鉄開業100年・創立70年史」)

あちらこちらに横たわる黒焦げになった人、焼けただれた電車の中でつり革にぶら下がったまま黒焦げになった人、爆風で建物につぶされた人、焼けただれた人、水を求めてさまよう人、……1945（昭和20）年8月7日の朝になる頃、焼け野原となった広島にうずくまって動けない人たちのほとんどが亡くなりました。

路面電車の再開に込めた思い

のちに広島電鉄株式会社取締役社長となる伊藤信之氏は、被爆直後の焼け野原に電車を走らせることに会社内でも反対の声が聞こえる中、まず交通運輸の再建を提案しました。



(撮影/塚池徳吉 提供/田子はるみ)

▲レールの復旧作業（1945年10月）

生き残った広電社員達は、運転再開に向けて動き出しました。手分けして被爆地となった線路沿いを歩き、車両の状態、線路や電柱、電線、橋の状態を確認しました。倒れていた電柱をトラックとロープで引っ張り起こし、切れた電線を繋ぎ引っ張るなど、懸命の作業を続けました。爆心地から西の15kmほど郊外にあった変電所から電気を送電し、原爆投下3日後の1945（昭和20）年8月9日に、路面電車は走り始めたのです。原子爆弾が投下された中、生き残った人々は、生きるために、これからのために、復興への道を歩み始めたのです。

(出典「広島電鉄開業100年・創立70年史」をもとに作成)

「会社内でも反対の声が聞こえる」とあるように、被爆直後は運転再開に向けて賛成、反対の意見がありました。それぞれどのような意見が出たのか考えてみましょう。

賛成

.....
.....
.....

反対

.....
.....
.....

広島市の街を走った路面電車



▲被爆当時の路線図

インターネットでは公開できません

●運転手として「一番電車」を運行した山崎さん

(試運転)ただ、ただ、前だけを見て運転した。
 「一番電車」が動いたときはうれしかった。みんな「電車が動くじゃないか」とたまげて見てくれたんがね。誰も、あの状態で電車が動くとは考えなかったから。お客さんは、けが人や市内へ家族を探しに行く人ばかりで、ただで乗っても「料金を」と言わりやせん。銭金じゃなかったから。
 ※たまげて：驚いて (出典『広島電鉄開業100年・創立70年史』)

●車掌として「一番電車」に乗務した堀本さん

己斐の宮島線の詰所まつしよに行き、顔も知らない会社の人からキップも釣銭もないカバンを手渡され、「お金のない人からは電車賃をもらわんでもええで」ということでした。
 乗客は無口な人が多く、「おお電車が動くんか」と驚かれる人、「鉄橋がこわいけんの一」と怖がる人、火傷の人、斑点が見える人、といろいろでした。「ありがとうございました」「すみません」と言い、電車賃の払えなかった人も多かったように思います。お客は少なかったと言えない状況でした。
 ※詰所：ターミナル、駅 (出典『広島電鉄開業100年・創立70年史』)

広島市の街を再び走った路面電車の様子を見た当時の人々は、どのような気持ちだったのでしょうか？

「銭金じゃなかったから」や「お金のない人からは電車賃をもらわんでもええで」の言葉には、どのような意味が込められているのでしょうか。

参考資料 市民生活の再建に向けて

被爆直後に再開した活動の様子

旧名称 (被爆建物)	再開した活動の様子	期間
広島電気軌道火力発電所 (広島電鉄千田町変電所)	被爆当日の午後から復旧にかかり、8月9日には電車が動き出した。多大な被害を受けたものの倒壊は免れ、早期の復旧を可能にした。	当日
牛田水源地送水ポンプ室 (広島市水道資料館)	市水道部職員186名のうち83名が原爆で死亡。鏡津神社で被爆した一人の職員は、火傷を負っていたにもかかわらず、牛田浄水場に駆け付け、壊れたポンプを応急修理した。被爆6時間後には予備の送水ポンプの運転が開始され、夕方からは給水ができるようになり、断水は避けられた。	
広島鉄道局広島工機部 (JR貨物広島車両所)	木造2階建ての事務所はガラスや屋根が飛び、天井も崩れた。臨時救護所として市内から避難してきた被爆者を収容。7日から業務を再開し、蒸気機関車の整備を行い始めた。	
芸備銀行本店 (広島銀行)	被爆から2日後には、銀行の支払い業務が開始された。来客のほとんどが印鑑や通帳を焼失していた。このくらいの残高があったはずという預金者の言葉を信じ、押印と念書のみで支払いに応じていた。	
福屋百貨店	自らも被爆しながら救護に追われていた医師が広島市に進言し、被爆から11日後には「臨時伝染病院」として使用された。進言した医師は、9月3日原爆症で亡くなった。	

被爆から、どのくらいの期間で活動を再開したのでしょうか？

まちの再建に携わった人々の声

電気を取り戻すんじゃ。
 広島に「力」を取り戻すんじゃ！！
 中国配電本店 熊野一夫さん

くたばるんは、
 やることやってからじゃ。
 広島市水道部 堀野九郎さん

通帳も印鑑もなくていい。
 信頼するんじゃお客様を。
 芸備銀行(広島銀行) 伊藤豊さん

物を売り届けるという仕事は、市民の活力になる。売れるものから売っていこう！
 福屋百貨店 熊谷直一さん

市民生活の再建に向けて、活動を再開しようとした当時の人々は、どのような願いや思いを持っていたのでしょうか？

学習2 平和記念都市建設に向けて

被爆後の復興に向けた広島市民の願いや思いを考えよう。

中島地区について

中島地区とは、現在の平和記念公園一帯のことをいい、幕末から明治・大正・昭和にかけて、市内有数の繁華街として栄えた歴史ある街でした。当時の人口は推定6500人（永土町を含む）とされています。中島本通り商店街には店舗が並び、映画館やカフェは多くの人でにぎわっていました。



▲被爆前の中島地区 (撮影：野村浩)



▲当時の商店街 (撮影：石田新平)

インターネットでは
公開できません



▲被爆後の中島地区 (撮影：美野 隆雄、大田正吉、佐藤 隆夫、広島市立中央図書館蔵)



▲原爆ドームと焼け跡に立つ家(右奥) (撮影：大田正吉、美野 隆雄、石田新平、佐藤 隆夫、広島平和記念資料館蔵)

QRコード

タブレットで写真を大きくして調べてみましょう。

原爆の投下後、軍事施設が集中していた地区には、1946（昭和21）年9月に約5000戸の市営の応急住宅が建てられました。同じように、爆心地となった中島地区にも、壊滅状態だったにもかかわらず、がれきをかき集めて建てた家もあり、そこで暮らし始めていた人たちがいました。人々は焼け残りの資材を集めて応急の家を建て、雨露をしのいでいました。

このような状況の中で、住宅を配置するように望む声も強くありましたが、爆心地周辺を恒久平和の象徴の地として整備し、平和記念公園及び施設の建設を進めることが計画されました（広島復興都市計画）。

しかし、被爆による壊滅的な打撃のため、広島ではほとんど税収が上がらず、財政難を極めていました。こうした事態に対処し、広島市に国からの特別補助が与えられるためには、憲法に基づく特別法である「広島平和記念都市建設法」の制定が必要でした。そのため、当時の浜井信三市長や地元関係者などが苦慮を重ね、国や国会に働きかけ続けました。

広島平和記念都市建設法の成立

1949（昭和24）年5月には、多くの関係者の努力によって、広島だけに効果のある「広島平和記念都市建設法」が国会で認められました。しかし、この法律の成立には、広島市民の賛成が必要とされることから、同年の7月7日に、日本で初めての住民投票が行われました。

この住民投票は、投票日が7月7日であったことから、当時「七夕選挙」とよばれました。投票の結果、圧倒的多数の賛成を得て、日本で初めての憲法第95条によるこの特別な法律が成立することになりました。（ひろしま平和ノート 5年生 広島市の復興と人々の願い 学習2をもとに作成）

1949（昭和24）年7月7日
広島市で「広島平和記念都市建設法」に関する住民投票が実施される

インターネットでは
公開できません

インターネットでは
公開できません

全国で初めての特別法
広島平和記念都市建設法は広島市だけに適用される特別法です。
日本国憲法第95条の規定に基づく特別法としては全国でこれがはじめて。

(1) 日本国憲法第95条【特別法の住民投票】
「一の地方公共団体のみに適用される特別法は、法律の定めるところにより、その地方公共団体の住民の投票においてその過半数の同意を得なければ、国会は、これを制定することができない。」



▲選挙啓発ポスター (写真：広島市立中央図書館蔵)

当時の広島市民は、どのような願いや思いを込めて、「広島平和記念都市建設法」の制定に賛成の票を入れたのでしょうか。

市民生活の再建と

1949（昭和24）年8月6日に「広島平和記念都市建設法」が公布、施行されたことにより、広島市を世界平和のシンボルとして、国をあげて建設することが位置づけられました。

1952（昭和27）年に「広島復興都市計画」は「広島平和記念都市建設計画」に改定され、その中では平和記念施設の建設という特別の事業が認められることになり、当時の復興計画としては特徴的な平和記念公園の建設が可能になりました。しかし、その実現の過程では、区画整理に対する反感など、市民の批判や不満が表出することもありました。

インターネットでは公開できません

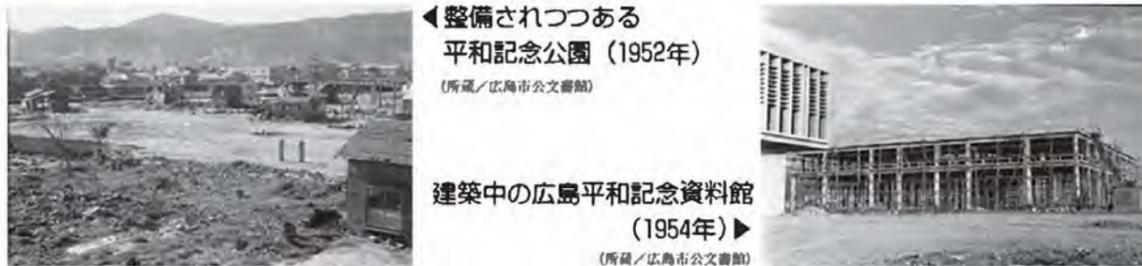
被爆都市である広島の復興は、国家的な意義をもつこと。ひいては国家的利益につながるものでなければならない。
浜井信三（復興の礎を築いた初代の公選広島市長）

インターネットでは公開できません

広島の原爆がどんなにおそろしいものであったか、世界中の、そして後世の人に分らせるのは、誰かがやらなければならない仕事である。
長岡省吾（初代広島平和記念資料館館長）

インターネットでは公開できません

世界的に何らかの機能的役割を果たしうるものでなければならない。単なる記念碑ではダメだ。この原爆の廃墟のなかから、力強くたくましく立ち上がるような、何かをつくりたい。
丹下健三（平和記念公園をデザイン）



様々な人々の思いがありながらも、建設の重要性を感じた人々により、被爆後の中島地区を「平和記念公園」として復興する計画が立てられました。現在の平和記念公園の果たしている役割について、これまでの学習を振り返りながら、あなたの考えを書きましょう。

学習3 広島に住む私たちの平和への思い

被爆直後の「広島」について知らない人たちに、あなたは何を伝えますか。

被爆35年後に作られた被爆直後の新聞 ※「広島」：「広島」の旧字体

広島に原爆が投下された直後の1945（昭和20）年8月7日と8日、広島では新聞が発行されていません。広島地方紙である中国新聞の記者、大佐古一郎さんは、被爆から35年たった1980（昭和55）年、当時を知る仲間の記者やカメラマンと一緒に手作りの新聞「広島特報」を発行しました。

「広島特報」の発行人は、大佐古一郎さんと、中村敏さん（元 同盟通信記者）と松重美人さん（元 中国新聞カメラマン）の3人です。3人は、1945（昭和20）年8月6日に爆心地に入って取材をし、写真を撮影しました。しかし当時は、原爆の被害についてありのままに伝えることはできませんでした。

被爆から35年たった1980（昭和55）年の夏、「あの日」の体験にこだわり続けてきた3人のジャーナリストたちは広島で再会。取材したことにもとづき、当時の気持ちをそのままに書くということを原則として、発行できなかった「昭和20年8月7日、8日」の日づけで新聞を発行しました。



（撮影／米国戦略情報調査団 所蔵／米国立公文書館 提供／広島平和記念資料館）

▲中国新聞社本館の原爆で焼けた輪転機

（NHK広島「核・平和特集 あの日、書けなかった広島 ～記者 大佐古一郎さんが、被爆から35年をへて作った1945年8月7日と8日の新聞～」をもとに作成）

インターネットでは公開できません

タブレットで写真を大きくして調べてみよう。

QRコード

メモ

なぜ、原爆の被害をありのままに伝えることができなかったのでしょうか？



大佐古さんたちが、被爆から35年を経て当時のことを新聞にしたのはなぜでしょうか。自分の考えをまとめましょう。

被爆直後の「広島」における原爆の惨状や復興に向けて尽力した人々の思いを知らない人たちに、あなたは何を伝えますか。
 これまでの学習1～3を振り返りながら、「あなたの心が動かされた思いや活動」を考え、新聞記事とするための構成メモを考えましょう。

・構成メモ

タイトル :

伝えたい思いや活動① :

見出し案 :

私の考え・感想 :

伝えたい思いや活動② :

見出し案 :

私の考え・感想 :

私の伝えたいこと

学習1、学習2ではどのようなことを学習したのでしょうか？



※新聞記事記入例

		見出し	○○○新聞	
			年 ○月 ○日	発行者 ○○ ○○
写真		見出し		
			まとめ	写真

参考資料

原爆の惨状を世界に伝えた海外の記者たち

「広島」を世界に発信する必要性を感じていたのは国内の日本人だけではありませんでした。ここでは何人かの海外の記者たちの行動や思いを紹介します。

1945年8月27日 レスリー・ナカシマ ※UP通信東京特派員 (アメリカの通信社)	8月22日、広島に住む母の安否を確かめに東京から広島へ戻る。その際に原爆の惨状を目の当たりにする。 8月27日に広島市への原子爆弾投下や放射能の影響について世界に向けて初めて報じた。
1945年9月3日 W.G.パーヴェット イギリスの記者	原爆投下後の広島取材し、現地の惨状や放射能による被害について世界に発信するが、アメリカの科学者により「広島で放射能に苦しんでいる者はいない。」と批判を受ける。
1945年10月頃 広島に入った外国人記者たち	GHQにより、報道内容(特に原爆について)が厳しく規制。 GHQの監視により、 <u>原爆の破壊力を称賛する記事を書かされた。</u>
1946年5月 ジョン・ハーシー アメリカの雑誌特派員	米日後、6人の被爆者を取材。 全世界に「 <u>原爆が人道に許されざる兵器</u> 」であることを発信。 米雑誌「ザ・ニュー Yorker」にて、ルポ「ヒロシマ」を執筆し、多くの反響を得る。
1948年3月 ルサフォード・ポーツ UP通信東京特派員 (アメリカの通信社)	キリスト教牧師であった谷本清へ取材し、その記事の中で「ノーモア・ヒロシマ」が初めて唱えられる。その後、駐留米軍紙に記載された「ノーモア・ヒロシマ」が <u>平和運動のスローガン</u> に用いられることになる。 ※谷本清牧師の教会での平和活動を手伝った女子大生に中村節子(後のサーロー・節子)がいた。
1949年4月 ジョン・ハーシー	多くの出版社にルポ「ヒロシマ」の出版を断られたが、ようやくルポ「ヒロシマ」日本語版が出版される。 ※アメリカでは学校の社会科の副読本として長きにわたり広く読み続けられている。
1985年4月23日 ジョン・ハーシー	再度広島を訪問。 原爆ドームの前で「 <u>破壊を防ぐ力は、広島・長崎の惨禍についての人類の記憶だ。</u> 」と語った。

※UP通信(現UPI通信)

インターネットでは公開できません

インターネットでは公開できません



(提供/法政大学出版局)

2年生 広島と世界とのつながり

インターネットでは公開できません

インターネットでは公開できません

(写真/ピクスタ)

国際社会の中で多様な人々と共に生きる者として、よりよい社会を築く上で解決すべき課題を探求し、広島の中学生として伝えたいことを考えよう。

●学習の流れ



被爆の実相を継承していくことにどのような課題があるのか考えよう。

被爆少女の死 ～佐々木禎子さん12歳～



(提供/佐々木繁夫、佐々木雅弘)

▲佐々木禎子さん(写真中央の母に抱かれている)



(撮影/ハーバート・D・オースチンJr. 寄贈/ブレット・M・オースチン 所蔵/広島平和記念資料館)

▲爆心地と禎子さんの自宅の位置

1945(昭和20)年8月6日、原爆が投下されました。家族と共に爆心地から約1.6kmの楠木町の自宅で被爆した禎子さんは、爆風で屋外まで飛ばされましたが、禎子さんはお母さんに背負われ避難しました。その際、三篠橋付近で「黒い雨」に打たれました。

佐々木家は1947(昭和22)年に新たに市内に理髪店を開き、生活に落ち着きを取り戻していきました。禎子さんも元気に育ち、幟町小学校に入学しました。

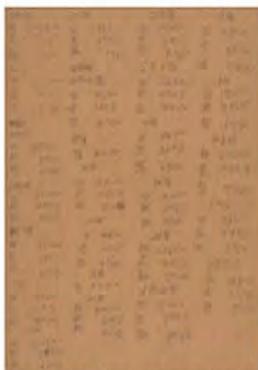
1954(昭和29)年11月下旬、禎子さんは軽い風邪をひき、首や耳の後ろにいくつかしこりができました。徐々にしこりは大きくなり、おたふく風邪のように顔がはれました。1月末には左足に紫色の斑点が見られました。

当初は風邪と思っていましたが、検査をした結果、「白血病」と診断されました。禎子さんは、2月21日に広島赤十字病院に入院しました。

入院から約1ヵ月後、禎子さんはクラスの友達と同じく中学校に進学はしたものの、通うことはできませんでした。8月6日、外出許可をもらって家族で平和記念式典に参列することにしました。しかし平和記念公園に向かう途中、禎子さんは歯ぐきから出血し、体調を崩したので式典には参加せず、すぐに病院に戻りました。

9月末、入院以降三度目の白血球の増加が始まりました。次第に自分では歩けないほどに、体調は悪くなりました。10月25日の朝、家族が見守る中、亡くなりました。12歳でした。

(広島平和記念資料館Web Site 平成13年度 第1回企画展をもとに作成)



(寄贈/佐々木繁夫、佐々木雅弘 所蔵/広島平和記念資料館)

▲血液検査の結果を書き写した半紙

焼け跡に立つ少女の死 ～藤井幸子さん10歳(被爆時)～

当時10歳だった少女は、爆心地から約1,200メートルの自宅で被爆しました。1階で、強烈な熱線を浴び、爆風で飛び散ったガラス片で負傷しました。火災の直前に倒壊した家から家族と共に脱出しましたが、直接熱線が当たった右手に重い火傷を負い、終戦直後にくっついた指を切り離す手術を受けました。

やがて少女は成長し、結婚後2人の子どもを育てながら幸せに暮らしますが、30代になり、がんに侵されました。

広島原爆病院で手術を受け、持ち直しましたが、がんの転移により体調不良が続くようになり再入院しましたが、1977(昭和52)年に42歳で亡くなりました。

(広島平和記念資料館展示パネル説明文をもとに作成)

インターネットでは公開できません



(提供/藤井哲神)

▲勤務先の前で二十歳の時の藤井幸子さん



(提供/藤井哲神)

▲24歳当時の藤井幸子さん(1959年1月撮影)

初めて広島平和記念資料館を訪れた海外の人々からは、「原子爆弾は一度炸裂したら、その時の被害で終わりだと思っていた」という感想が多くあります。このような感想に対して、あなたの考えを書いてみましょう。

.....

.....

.....

考えたことを学級やグループのみんなと交流してみましょう。



メモ

.....

.....

.....

被爆の実相を継承するために

インターネットでは
公開できません

インターネットでは
公開できません

広島市は2012年度より、被爆者自らの体験を語る「被爆体験証言者」と、証言者の記憶と平和への思いを語り継ぐ「被爆体験伝承者」の研修制度を開始しました。

研修を終えた人は、広島平和記念資料館の運営などを手掛ける（公財）広島平和文化センター（広島市中区）の委嘱を受けて、資料館や派遣先の学校などで、あの日の記憶や、被爆者から受け継いだ証言などを語っています。

※委嘱：仕事や役職を人にたのんでやってもらうこと。

インターネットでは
公開できません

インターネットでは
公開できません

証言者や伝承者の方々は、なぜ自分の思いや経験を伝えようとしているのでしょうか？



（中国新聞社の記事をもとに作成）

被爆の実相を継承していくために、現在どのような課題に直面しているのでしょうか。また、その課題を解決していくために、私たちにできることはどのようなことでしょうか。あなたの考えを書きましょう。

参考資料

語り継がれる平和へのメッセージ

原爆の子の像

禎子さんが亡くなったのち、禎子さんの同級生6年竹組でつくった同窓会「団結の会」は全国中学校校長会の会場の前で手作りの2000枚のピラを配り、「原爆の子の像」を建てることを全国の中学校に呼びかけました。呼びかけ人は「広島市立鞆町中学校1年生故佐々木禎子級友一同」とピラに書きました。

新聞やラジオなどで報道され、鞆町中学校には全国からたくさんの寄付が送られてくるようになりました。禎子さんの死から1年後の10月に、広島平和記念公園へ「原爆の子の像」を設置することが決まり、建立は現実のものとなりました。

像を建てるための運動を始めて2年半、1958（昭和33）年5月5日、ついに「原爆の子の像」が完成しました。

インターネットでは
公開できません

サダコと折り鶴 世界へ人々の思いをつなぐ

外国から広島に寄せられる折り鶴に込められた平和への願いを広島の子どもたちが受け止めた証として、2000（平成12）年、鞆町中学校校庭に「折り鶴の碑」が建設されました。碑には「折り鶴の願いをここに」という碑文が刻まれています。禎子さんの命日である10月25日を「折り鶴の日」とし、平和集会を行ったり、毎年7月下旬に広島市内の小中学生が原爆の子の像の前に集まったり（「原爆の子の像 碑前祭」）して、広島の子どもたちは平和の願いを発信する行事を行っています。

「原爆の子の像 碑前祭」は鞆町中学校が毎年、市内の小中学校に呼びかけて実行委員会実施校を募集し、中学生が運営しています。小学生や外国の人々も参列し、さまざまな世界の言語で平和の誓いを宣言したり、群読で平和を訴えたり、折り鶴の献納などを行ったりしています。

焼け跡に立つ少女

広島平和記念資料館の改装前の本館入り口には、米軍が広島市上空から撮影したきのこ雲の写真が掲げられていました。リニューアル後は、上空からではなく、きのこ雲の下にいた人々の視点で原爆の被害を伝えるため、来館者にそのことを入り口から意識してもらおうと、人の姿を見せる写真を選定しました。被爆直後の影響に加えて放射線での後の人生も苦しんだ彼女の生涯が、本館の展示全体で伝えようとする原爆被害の実態を物語るように、爆心地から1.2キロの距離にあった自宅で被爆した当時10歳の藤井幸子さんの姿を捉えた、ほぼ等身大にまで引きのばされた写真「焼け跡に立つ少女」が、来館者を迎えるスタイルに改められました。



◀本館入り口の様子

マルセル・ジュノー ～武器なき勇者～



▲マルセル・ジュノー

1945（昭和20）年8月、世界で初めて核兵器が広島と長崎に投下され、多くの人々が犠牲となりました。原爆投下の影響を確かめるべく外国人医師として初めて広島入りしたのは、「ヒロシマの恩人」として今も慕われるマルセル・ジュノー博士でした。

広島を救った15トンの医薬品

1945（昭和20）年8月9日、広島に続き、長崎にも原爆が投下されたその日、ジュノー博士は、赤十字国際委員会（ICRC）の駐日主席代表として来日しました。来日した博士の当初の目的は、連合軍捕虜などの処遇を調査し、やがて訪れる終戦時に捕虜たちの帰還を行うことでした。しかし、原爆被害の惨状を知ると直ちに連合軍総司令部（GHQ）へ救援を要請、戦争が終わるや調達した15トンの医薬品を持って9月8日に自らも広島入りし、被害調査に当たるとともに治療に携わりました。

被爆後の広島では医薬品不足の状態が続いたため、ジュノー博士から提供された医薬品は大変貴重なものでした。

ジュノー博士の尽力により救われた被災者は、数万人とも言われています。

人道主義を追求して

広島県庁に勤めていた松永医師がジュノー博士とともに救護所に立ち寄り、若い軍医から被爆者の解剖の標本や写真について説明を受けたときのことで、ジュノー博士は、写真を十数枚選り出し、赤十字で借りたいと申し出ました。

軍医が「軍事機密だからお貸しすることはできない。」と断ったとき、ジュノー博士は「何が軍事機密ですか！ あなたはまだ戦争をしているつもりですか。不幸な戦争がもたらしたこの悲惨な証拠をジュネーブに持ち帰り、全世界の人々に見せることが戦争の再発を防ぐことになると思いませんか。亡くなった被爆者やいまもなお十分な手当が受けられない患者にとって、それがもっとも意義のあることだ。」とテーブルを叩いて詰め寄り、軍医を説得したといひます。

松永医師は、「ジュノー博士の人道と正義を追求する姿勢に感銘を受けた。」とのちに語っています。

私がこれまで目にしてきたことを、「過去の出来事」として片づけるわけにはいきません。いまだに同じような光景が目の前に広がり、この先はさらに広がっていくでしょう。助けを呼んでいる人たちは数知れず、彼らのその声はあなたに向かっているのです。

70年以上前に書かれた彼のメッセージが、今も色褪せることなく私たちへの警告となっている現状に、私たちはもう一度思いを巡らせる必要があるかもしれません。

(日本赤十字社Web Site www.jrc.or.jp/activity/international/news/180809_005375.htmlをもとに作成)

広島のために、なぜここまで支援をしてくれたのでしょうか？



▲マルセル・ジュノー博士記念碑

世界の人々の「平和」や「核兵器」に対する考えや思いを読み解きながら、広島市の市民として世界の人々へ発信すべき思いを考えよう。

世界の人々にとっての「平和」と「核兵器」

●オバマ元アメリカ大統領

2016（平成28）年5月27日、現職のアメリカ大統領として初めて広島を訪問したオバマ元アメリカ大統領は、平和記念公園で「核兵器のない世界」の実現に向けたメッセージを発信しました。

インターネットでは公開できません

「なぜわれわれはこの地、広島に来るのか。それほど遠くない過去に解き放たれた恐ろしい力について考えるためだ。技術の進歩は、人間社会が同様に進歩しなければ、われわれを破滅に追い込む可能性がある。原子の分裂につながる科学の革命は、道徳的な革命も求めている。だからこそ、われわれはこの場所に来た。私の国のように核を貯蔵している国々は、恐怖の論理から逃れ、核兵器のない世界を追求する勇気を持たなければならない。」（一部抜粋）
（オバマ元アメリカ大統領の広島訪問における平和記念公園でのスピーチ（2016.5.27））

インターネットでは公開できません

インターネットでは公開できません

インターネットでは公開できません

●ローマ教皇フランシスコ

2019（令和元）年11月24日、ローマ教皇フランシスコが、教皇としては38年ぶりに被爆地である広島と長崎を訪問し、核兵器廃絶に向けた行動を世界に呼びかけました。

インターネットでは公開できません

「戦争のために原子力を使用することは、現代において犯罪以外の何ものでもありません。人類とその尊厳に反するだけでなく、私たちの共通の家の未来におけるあらゆる可能性に反します。戦争のための最新鋭で強力な兵器を製造しながら、平和について話すことなど、どうしてできるのでしょうか。自らを正当化しながら、どうして平和について話せるのでしょうか。」（一部抜粋）
（ローマ教皇フランシスコの「平和のための集い」でのスピーチ（2019.11.24））

題名：

3年生 持続可能な社会の実現

インターネットでは
公開できません

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



インターネットでは
公開できません



(写真：ピクスタ)

よりよい社会を築くために国際社会のさまざまな課題を見つけ、解決に向けてどのように行動すればよいか考えてみよう。

●学習の流れ



1年生の時に学習したことなど、これまでに学習したことを振り返りながら、あなたの伝えたいことを考えてみましょう。



学習1

核兵器をめぐる世界の現状

核軍縮に向けた世界の動きや核兵器の現状を知り、問題解決に向けて考えよう。



核軍縮への動き

●国際原子力機関 (IAEA)

原子力の平和利用推進と軍事転用防止を目的とした国際機関です。核拡散防止のための査察を担うため「核の番人」と呼ばれます。米国の提唱で1957(昭和32)年に設立されました。本部はウィーンで、173カ国が加盟しています(2021年10月時点)。

●NPT再検討会議

1970(昭和45)年に核不拡散条約(NPT)が成立しました。NPTでは、条約ができる前の1967(昭和42)年1月1日までに核兵器を持っていたアメリカ、ソ連、中国、フランス、イギリスを「核兵器国」、それ以外の国を「非核兵器国」と定義し、核兵器を持つ国を増やさないと、核兵器を持っている国も誠実に核軍縮交渉を行わなければならないということなどが示されています。

核軍縮や不拡散に向けての交渉が5年に1回の「再検討会議」を中心に行われています。

(日本が重視する主要5項目)

- 核戦力の透明性の確保
- あらゆる種類の核兵器の更なる削減や核兵器削減交渉の将来的な多国間化
- 核兵器の非人道的影響の認識の共有
- 世界の政治指導者及び若者の広島・長崎訪問
- 地域の核拡散問題の解決

なぜ、5年に1回行われているのでしょうか?

インターネットでは公開できません



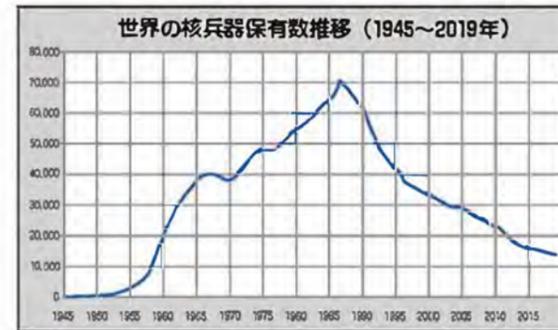
●核兵器禁止条約

2017(平成29)年7月7日、122カ国の賛成多数で国連で採択。
2022(令和4)年6月29日現在、86カ国が署名し、66カ国が批准を済ませています。核保有国や日本を含む「核の傘」依存国は背を向けています。

条約の主な特徴

- 被爆者(ヒバクシャ)の苦しみと被害に触れ、核兵器廃絶に向けて被爆者などが行ってきた努力にも言及しています。
- 核兵器の開発、実験、製造、取得、保有、貯蔵、移譲、使用、使用の威嚇などの活動を、いかなる場合にも禁止しています。
- 核兵器を廃棄する義務を果たすことを前提に、核保有国も条約に加盟できると規定しています。

(広島市Web Site「核兵器禁止条約の概要」より)



なぜ、このような推移になっているのでしょうか?



平和首長会議

1982(昭和57)年6月24日、荒木武 広島市長(当時)は、米国・ニューヨーク市の国連本部で開催された第2回国連軍縮特別総会において、世界の都市に国境を越えて連帯し、共に核兵器廃絶への道を切り開こうと呼び掛けました。また、広島・長崎両市は、この呼び掛けに賛同する都市(自治体)で構成する機構として、世界平和連帯都市市長会議(現・平和首長会議)を設立しました。1991年には、国連経済社会理事会のNGOに登録されています。

加盟都市数 166カ国・地域
8,188都市
(2022年7月1日現在) (うち国内1,737都市)

エリア名	国・地域数	加盟都市数
アジア	39	3,291
オセアニア	9	135
アフリカ	49	436
ヨーロッパ	41	3,256
北アメリカ	3	332
ラテンアメリカ・カリブ海地域	25	738

地域: 台湾・パレスチナ・北キプロス(アジア)、北マリアナ諸島・仏領ポリネシア(オセアニア)、ソマリランド(アフリカ)、コンボ(ヨーロッパ)、グリーンランド(北アメリカ)、プエルトリコ(ラテンアメリカ・カリブ海地域)

(提供/広島平和文化センター)

様々な核軍縮への取組がある中で、核兵器をめぐる課題をより一層解決していくためには、国や地域同士が今後どのような取組を行っていくべきなのでしょうか。あなたの考えを書きましょう。

学習 2 国際平和に向けての取組

国際平和を願う人々の言葉や活動から自分たちにできることを考えよう。

サーロー・節子さん

「同情は求めています。人々に行動してほしい。」

そのために私は語り続けるんです。」

インターネットでは
公開できません

インターネットでは
公開できません

インターネットでは
公開できません

広島女学院高等女学校に進学後、13歳で勤労働員されました。爆心地から1800mの場所にあった陸軍第2総軍司令部で被爆。倒壊した建物の下敷きになりましたが、九死に一生を得ました。その後、市内の平和活動を行う谷本牧師のもとで活動を手伝いました。

1955（昭和30）年、ソーシャルワーカーとしてカナダ・トロント市教育委員会に勤め始めました。カナダで初めての原爆展を開くなどの活動をし、後にカナダ・アメリカ・イギリス・日本などで被爆体験を語り、核兵器廃絶について訴えてきました。

核兵器を法的に禁止する条約の採択に貢献し、2017（平成29）年、彼女と共に活動してきたICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）がノーベル平和賞受賞。授賞式で世界に向けて自身の被爆体験や核兵器の非人道性を語り、核兵器廃絶について演説をしました。

- サーロー・節子さん
- ◆広島市南区出身。
 - ◆カナダ・トロント市在住の被爆者。反核運動家。
 - ◆2014年第26回谷本清平和賞受賞。
 - ◆2017年ノーベル平和賞受賞。

サーロー・節子さんは私たちにどんなことを伝えようとしているのでしょうか。

美甘進示さん・章子さん

「原爆を落とした米国人を恨むな。平和の懸け橋になれ。」（美甘進示さん）



▲美甘章子さん著書



▲映画ポスター



▲美甘進示さん
（章子さんの父）

- 美甘章子さん
- ◆広島市東区出身。
 - ◆アメリカ合衆国サンディエゴ市在住の被爆二世。
 - ◆2014年英国貴族院より世界平和賞受賞。

1945年8月6日、世界で初めて広島に投下された原子爆弾を至近距離で被爆した父・進示さんの壮絶な体験を、長い時間をかけて丹念に聞き取り、2013年に英語で書籍化。2014年には、『8時15分 ヒロシマで生きぬいて許す心』（講談社エディトリアル）を日本語版で執筆・出版し、2020年に映画化（監督：J.R. ヘップフェルフィンガー）。

Q（美甘章子さんは）アメリカで活動されていますが、そのきっかけは？

「広島や長崎のことは知っているけれど、あのキノコ雲の下で、どういう思いをして生き残ったのかという生存者の話を聞いたことはないし、あなたのお父さん（美甘進示）の生き方を他の人にも伝えたいけれど、その術がないので、ぜひ本を書いてほしい」と言われ、決心しました。

Q 父の美甘進示さんからの教え

「戦争ではどの国もひどいことをしていたし、日本も例外ではない。アメリカが悪いのではなく戦争が悪いのであって、立場の違う人たちのことを理解しようとしないうちに、もしくは自分の利益追求に走ってしまう人間の弱さが戦争につながる。どちらが悪いという考え方は全く意味がない」とたびたび説かれ、橋渡しをする人間になるように育てられました。『そのために英語をしっかりと学びなさい』と小さい頃からずっと言われて育ちました。（『8時15分 ヒロシマ 父から娘へ』映画化 原作者著者インタビューより）

美甘進示さん・章子さんは私たちにどんなことを伝えようとしているのでしょうか。

.....

国際平和を願う人々の言葉や活動から、自分たちができることはどんなことだと思いますか。あなたの考えを書きましょう。

.....

学習 3

私の考える「平和」を伝えよう

世界の人々に発信する平和メッセージを英語で書いてみよう。

児童・生徒の取組

小学生・中学生

こどもピースサミット

小学生による作文募集や、「平和の歌声・意見発表会」の開催、そして、生命の尊さと一人一人の人間としての尊厳をテーマに「平和への誓い」を発信します。



中学生による「伝える HIROSHIMA プロジェクト」

平成27年度、被爆70周年記念事業としてスタートし、広島市内の中学生が、広島を訪れた海外の人々に対して、英語で平和のメッセージを伝える活動を行います。



高校生

「原爆の絵」

「原爆の絵」は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの生徒が、被爆者の証言に基づき、原爆被害の実相を後世に伝えるための貴重な資料として制作しています。



ピースモニュメント

広島市立広島商業高等学校の生徒が主体となり企画・運営する「広島市商ピースデパート」ピース部門では、ピースモニュメントの展示等を行っています。デパートの売上の一部は広島・長崎の平和事業に寄付されています。



銅板折鶴

2010年ノーベル平和賞受賞者世界サミットにおいて、広島市立広島工業高校の生徒が、ノーベル平和賞個人受賞者への記念品として、銅板折鶴を制作し贈呈しました。



言葉や絵、歌など色々な発信の方法があります。



国の内外から多くの人々が広島を訪れた際に、被爆の実相、その後の復興の様子に触れる中で、さまざまなメッセージ、コメント等を残しています。

これまで学習したことを振り返りながら、自分の言葉で広島を訪れた世界の人々に「平和」を伝えるために、あなたなら何を語りますか。

あなたの伝えたい平和メッセージをカードに英語で書いてみましょう。

これまで学習したことを振り返ってみましょう。



※メッセージカード記入例

名前○○ ○○

英文

○○○.....
.....○○.

和訳

「○○.....
.....○○」

(署名) 年 月 日

小学校で学習したことを振り返ろう。



1 原子爆弾の投下とその被害

●原子爆弾が投下された日時

広島市
1945 (昭和20) 年 8月6日 午前8時15分

●原子爆弾が炸裂した日時

長崎市
1945 (昭和20) 年 8月9日 午前11時2分

●被害の状況

爆発の瞬間、非常に強い熱線と放射線が四方へ出されました。また、熱によって周りの空気が大きくふくらみ、爆風となって広がりました。そして、これら三つが複雑に作用して大きな被害をもたらしました。

① 熱線による被害

原子爆弾が爆発したときの爆発点の温度は数百万度となり、空中に発生した火球は、1秒後には直径400mを超える大きさとなりました。

この火球から四方に出された熱線は、爆発0.2秒後から3秒後までの間、地上に強い影響を与え、爆心地周辺の地表面の温度は3,000~4,000度にも達しました。(鉄の溶ける温度は約1,500度)



▲方代橋の欄干の影 (撮影: 末重 提供: 広島平和記念資料館)

② 爆風による被害

原子爆弾が爆発した瞬間、爆発点は圧力が高まり、周りの空気が急にふくらんで、爆風となりました。

爆心地から半径2kmまでの地域では、ほとんどの木造の建物は壊され、鉄筋コンクリートの建物は、つぶれなかった場合でも、窓や家具などが吹き飛ばされ、その後内部は全て焼けてしまうなどの大きな被害を出しました。

爆風により、人々は吹き飛ばされ、即死した人、けがをした人、倒れた建物の下敷きになって亡くなった人、下敷きになったまま焼け死んだ人がたくさんいました。



▲爆風で傾いた時計店 (撮影: 川本茂雄 提供: 日本経済)

③ 放射線による被害

原爆が爆発して1分以内に「初期放射線」が大量に放出されました。特に、爆心地から1km以内で直接、放射線を受けた人は、ほとんど亡くなりました。

さらに、そのあとも「残留放射線」が地上に残りました。このため、直接被爆しなかった人でも、救援・救護活動や家族をさがすために爆心地近くに行つて放射線を受け、なかには病気になったり亡くなったりする人も出ました。また、爆発により巻き上げられた、放射性物質を含んだチリやススが、黒い雨となって降りました。雨の中には放射性物質が含まれており、この地域で井戸水を飲んでいたのである人は、そのあと3か月にもわたって下痢をしたそうです。

(広島平和記念資料館 学習ハンドブック)

2 原爆ドームが世界遺産へ

原爆ドームは、被爆前は「広島県産業奨励館」という名前で、県内の物産品が展示販売され、博物館や美術館としても利用されていました。

原爆ドームの保存については、賛成する人たちがばかりではありませんでした。建物が壊れる危険もありました。また、被爆のつらい思い出につながるということから、「取り壊す」という考えがあったのです。

しかしながら、1歳の時に被爆し、16歳で白血病でなくなった格山ヒロ子さんの日記をきっかけに、「原爆ドームだけが原子爆弾の恐ろしさを伝え、二度と繰り返してはならないと訴えかけているのだ。」という思いから、「保存しよう」という声が高まり、1966 (昭和41) 年に広島市議会で原爆ドームの保存を決定しました。

そして、「原爆ドーム保存募金」が始まり、広島市をはじめ国の内外から募金が集まりました。この募金により、1967 (昭和42) 年に保存工事を始めることになりました。

原爆ドームを保存・継承していくために、世界遺産への登録を求める声が高まり、1996 (平成8) 年12月にユネスコの世界遺産として登録されました。



(撮影: 奇巖/社説ライターズ 所蔵: 広島平和記念資料館)

▲被爆後の様子

3 こどもピースサミット

8月6日、広島平和記念公園で行われる平和記念式典では、広島市の小学校6年生の児童代表2名が、「平和への誓い」を読み上げます。この式典で読まれる「誓い」は、各小学校の6年生が「平和の意見文」を書き、その中から選ばれた20名による「ピースサミット」を経て、代表者が決まり、みんな考えていくものです。6年生になると、それに向けて、「平和の意見文」を書き、平和の気持ちを表現します。



▲「平和への誓い」を読み上げる児童